

三橋鎌岳・獅子牡丹唐草彫木前机と近代の鎌倉彫について

目白漆芸文化財研究所研究員

鶴見大学仏教文化研究所兼任研究員

室瀬 祐

只今ご紹介に預かりました目白漆芸文化財研究所の室瀬祐と申します。よろしくお願い致します。

私は普段、この工房で漆芸文化財の保存・修復、また、漆芸作品の新規製作、そういったことに携わっている者です。この鶴見大学の大学院に通わせて頂いておりました。その中で、元々は美術の分野の人間ですので、漆芸の技術・材料、そういったものを研究テーマとして、論文などを書かせて頂いたりしています。それで今回、「曹洞宗の文化財」というテーマの中で、一つ、皆さんにご紹介させて頂きたいと思っっているのが、この三橋鎌岳作「獅子牡丹唐草彫木前机」と長い名前ではありますが、こちらは、鎌倉彫が施されている前机になるのですけれど、この鎌倉彫というものがそもそも何なのか、ご存知の方にとっては基本的な話が大半になってしまいかもしれないのですが、少し、近代の鎌倉彫の発展などを交えまして、こういった経緯の中で作られた文化財なのか、ということをお話しできればと思っております。

まず、鎌倉彫、そういったものをご想像されるでしょうか。（スライドを見せながら）こんなものでしょうか。これは……、鎌倉彫ですね。間違いなく鎌倉彫です。今も鎌倉に行きますと、色々なお土産屋さん、鎌倉彫が、手鏡みたいなものが置かれていたりするんですが、では一方で、今回取り上げる前机はどのようなものかと言いますと、こちらになります。（スライドが変わって）先ほどの手鏡とは似ても似つかない、これが同じ鎌倉彫かと、思われるような、非常に豪華な前机になっています。先日の展覧会でご覧になられた方は、近くで見ることが出来たか思いま

す。普段は、人前にほとんど出ることが無い貴重な作品です。こちらに施されている鎌倉彫についてお話して行きたいと思います。

まず、鎌倉彫とは何かと申しますと、ここに書きましたように、木彫漆塗、昔は彫木漆塗という言葉の方が一般的だったようですので、そういった両方の表記をしておりますが、意味は一緒です。木を彫ったものに漆を塗って仕上げたものです。では、木を彫って漆を塗れば、全部鎌倉彫なのか、なかなかそこは解釈の難しいところなのですが、現在、鎌倉彫という言葉が全国的に一般的な用語として使われているのは事実です。これに関しては、また後で改めてお話します。

鎌倉彫は、そもそも一体誰が作っているのか、ということになると、ここで非常に大事な存在となるのは、鎌倉仏師という人たちになります。先ほど、薄井先生のお話の中で、非常に興味深い院派仏師の話が出てきましたが、資料の中にそれとは別に、宋の文化を非常に強く受けた鎌倉の装飾文化というものもあります。そういった系列の仏師の方々は、もちろん仏像を彫るのがメインになるのですが、それと並行して、仏具ですね、仏教の為に使われる道具類、そういったものをたくさん作っていたという経緯があります。そして、もう一つのキーワードとして彫漆と鎌倉彫を挙げておきましたが、大陸から渡ってきた文化、そういった中には、唐物と呼ばれる日本では作ることの出来ない魅力的な宝物がたくさんあります。そういったものの影響を強く受けて、発展してきたのが、今ここに写真を挙げているような香合であったりします。こちらは金蓮寺というところにあります、俱利香合です。「俱利」というのが複雑な線文様なんですけど、こういった文様は、そもそも大陸から渡ってきた彫漆という世界の装飾を鎌倉彫で表現しているものです。

そして、駆け足になってしまいましたが、歴史を確認すると、建長寺・円覚寺などが建設された十三世紀の頃から禅宗寺院というものが建てられるようになるわけですが、それに伴って、宋風の文化というものも、徐々に日本に浸透

していきます。特に鎌倉に幕府が開かれてから、文化の中心が鎌倉になりますので、その中で、鎌倉には仏師がたくさん揃って行くわけです。そういうた仏師が増えて行く中で、仏具を作る仕事の需要がどんどん増えていきます。そして、先ほどお話を挙げました、俱利の香合もそうですけれど、全国的に、木を彫って漆を塗って何かを作るということが盛んになっていくという経緯があるようです。

そして、ここに一つ、『実隆公記』に書いておりますが、この中に、「堆紅鎌倉物」という記述が出てくるのですが、ここで初めて、この「堆紅」という言葉が、これは木彫の漆塗を中国で表す言葉なんです、その言葉と「鎌倉」という地名が一緒に出てくる。つまり、十五世紀には、鎌倉で彫り物に漆を塗るということが一つの代名詞として使われるほどに認知されていた時代になっていたことが分かる文章です。一つちょっと難しい話なんです、**「堆紅」という言葉**、今ここに出しました五つの言葉、「剔紅」「剔黒」「堆朱」「堆黒」と読みますが、意味としては、かなり複雑です。中国の言葉で、使われているのが、前の三つ、後の二つが日本で使われている言葉です。「剔紅」「剔黒」というのは、彫漆という分野の、その中の赤いものと黒いもの。日本ではこれを「堆朱」「堆黒」と言っています。では、中国で言われる「堆紅」とは何なのか。これは、彫漆とは違って、木を彫って、漆を塗ったものが堆紅と呼ばれていたんですね。この言葉がぐじゃぐじゃと日本に入ってきて、色々な使われ方をしている、実は、全てが正しく日本で使われているとは限りません。ただ、このルールにならつていのであれば、堆紅というものが、現在の鎌倉彫に近いもので、それを鎌倉で作っていた、というのは、想像出来る範囲の話なのかと考えています。

ここからずっと時代が飛びますが、そこに大きな転機が訪れるのが、幕末の話になってきます。ずっと仏像を作りながら仏具も作ってきた鎌倉仏師ですが、明治に入ってから、神仏分離令に伴う廃仏毀釈という大変悲しい運動が盛んになってくるのですが、この時代、「仏様はたくさん捨てられました」なんて話も残っているのですが、そう

いった流れの中で、仏師の仕事というのは激減します。鎌倉においてもそれは例外ではなく、鎌倉仏師の仕事というのは、本当に少なくなってしまうようです。その中で、たくさんいた鎌倉仏師の家も、ほんの僅かしか残らないんですね。その中で残った二軒が、三橋家、後藤家という二つの家になります。この二つの家の、当時の当主というのが、三橋家は二十六代の鎌山（一八四五～一九一四）、後藤家は二十六代の斎宮（一八四一～一九二二）です。この二人が、まさにこの時代に鎌倉仏師として生きていた二人なのですが、仏像を作っているには生きていけない、ではどうしたらいいのか、となった時に、大きなイベントとして開かれたのが、第一回内国勸業博覧会です。明治政府が産業技術に対して、力を付けて欲しいという願いがあったイベントなのですが、ここで、二人の仏師が、仏像と共に、彫りを付して漆を塗った器物というものを出展します。こちらが非常に好評を博しまして、受賞をしたことをきっかけにして、この二人の仏師は、これから仏像だけではなくて、そういった器物というものを前面に押し出して、仕事を、技術を残して行くべきだということを考えて、非常に精神的に活動します。その中で、徐々に「鎌倉彫」という言葉が、成立していくという経緯があります。先ほどの、人物の話に戻りますが、鎌山と斎宮のそれぞれの息子に、鎌岳（一八七五～一九三八）、運久（一八六八～一九七四）という人がいます。この四人が、現在の鎌倉彫の基礎を作った、一番主役となる四人であると考えておいて良いと思います。そして、その意志を受け継いだ二十八代、二十九代、三十代といった人たちが、現在、三橋家だと二十九代昌山さん、三十代倅山さん、後藤家では、圭子さんという方と、妹の尚子さんという方が、いまでもその脈を続けているということになります。そして、先ほど話がありました、二十八代にもう一人鎌山さん（一九〇三～一九六五）と後藤家の俊太郎さん（一九二三～二〇〇六）という方がいらつしやるのですが、この頃に、また一つ大きな転機が訪れまして、それが横須賀線開通によって、鎌倉の別荘地化というのが進みます。そこで、上流階級の人たちが、鎌倉の海辺に惹かれていくわけですね。そして、お教室であったりとか、いろんな形で鎌倉彫が世の人に周知されていく。そして、大正の初期には、数十人しかいなかった

た工人が、昭和の初期には四百人くらいに増えるのです。教室も含めて鎌倉彫に携わる人を全国的に見ると五万人にもなったと言われた時代もあったそうです。鎌倉には現在、若宮大路に鎌倉彫会館というものがありますが、そういったものも、この流れの中で出来てきた非常に充実した施設です。

後藤彫、三橋彫という言葉が出てきます。今言いました、後藤家、三橋家にしかない、鎌倉彫の世界で、ここに一体どのような差が出てくるのか。作品を実際に見てみますと、後藤彫の一番最初の方、斎宮さんの作品がこちら。運久さんの作品の連獅子文香盆と呼ばれるのがこちら。こちらは運久さんの作品になりますが、このあたりの作品、三つほど見てきて、一つ共通して言えることがあります、拡大するとわかるのですが、最初にお見せした俱利紋の香合と比べますと、非常に表情が丸くなっているのが分かるかと思えます。こういった風に、角を非常に上手く丸く表現をして、そして、引きで見ますと、文様を周りよりも一段下げて、なだらかに表情を付けていくという装飾に、塗りを少し古びた表情にしていく、乾口塗りという塗りがあるんですが、そういったところも合せて、装飾効果を出していく、これらが、後藤家の作品の特徴です。一方で、三橋家の作品とは、こういうことになります。ぱつと見てもだいぶ印象が違うなというのが分かるかと思うのですが、二十六代の三橋鎌山の作とされていますが、実はこちらは鎌山一人の手で作ったものではありません。凶案・意匠といったものを鎌山が遂行していったもの、そして彫り途中であったものを息子の鎌岳が引き継いで、更にその息子の鎌山の三代をかけて作ったと言われる大作なんですね。特徴を言葉にするのが難しいところもあるのですが、分かり易いところというと、輪郭線が非常にはっきりしていると思います。模様の一つ一つが縦に、すばんすばんと深く彫り込まれている。それと、葉っぱの重なりを見て頂きますと、ものすごく複雑に葉っぱが何重にも重なっている「重ね彫り」と呼ばれる特徴があったりします。そして、塗りというものも、鎌山は深い彫りを上手く塗っていく技法をたくさん開発していたりして、こうした彫りの技法と塗りの技法を合せて「三橋彫」という風に言われています。あともう一つ、特徴的なものとして挙げられるのは、葉脈を

彫る時の表現で「葉研彫り」と呼ばれる、葉を崩す時に使う葉研という古い道具がありますが、そのように、かなり尖った彫りである葉研彫りも一つの特徴として良いと思います。(スライドが変わって)そして、こちらも鎌岳の作品で、端っここの周りの部分にそういった装飾がなされています。これが三橋家の特徴的な彫りになってきます。

そして三橋鎌岳は、どういった人物かと言いますと、一八七五年から一九三八年まで生きた方で、この方は、京都に十二年ほど移住している期間があります。一九二三年から一九三五年なんですが、その間に、茶の湯に深く傾倒しており、多くの茶器を製作していて、鎌倉彫というものにまた新たな世界を切り開いた人としても知られています。そして、非常に緻密な彫りと、塗りの手法をたくさん開発したことでも知られている人物です。その三橋鎌岳が作った獅子牡丹唐草の彫木前机、作られた年代については、実ははっきりと資料に残っているかどうか、まだ分かっていないのですが、いろいろな方とお話をしている中で、恐らく(總持寺の)仏殿の落慶が、大正四年(一九一五)になりますので、この時期に合わせて製作されたものであろうと考えられます。一つ、興味深い点としては、こちら三橋鎌岳作で恐らく間違いは無いと思うのですが、三橋鎌岳という名前が入っているわけではないんです。では、どういうことかと言うと、この前年に、鎌岳の父である鎌山が亡くなっています。恐らく、この作品自体は、鎌山が引き受けた仕事であって、鎌岳が最終的にそれを引き継いで収めたという経緯があったものと考えられます。これだけの大作ですから、一人で彫るとするのは、恐らく不可能であろうと考えられますので、父親の鎌山、鎌岳、息子の鎌山と、その弟子と、大勢で携わって作った作品であると考えられます。この前机を作る上での、一つの基準になっている作例が、円覚寺に収められている前机です。こちらは非常に古い作品ですが、形態や装飾の効果が類似しています。恐らく鎌岳たちは、こういった作品を一つの模範として前机を作ったのでしょう。細かく見ていきますと、鏡板の部分、獅子が踊るように表現されている、そこに唐草の複雑な透かし彫りが行われています。下の部分につきましても、幕板の部分も圧巻なのですが、立体感がもの凄いです。三橋流の彫りというのは、輪郭が非常にきりっきりとして

いる彫りが特徴ですので、そういったものがよく表れている例であろうと思います。牡丹の花も繊細でありながら、非常に力強く、他には例のないような透かし彫りで、なおかつ、そういった鎌倉彫の特徴もよく出ています。その意味で、他には類例の無い、大事な作例になるかなと考えています。こういった足の作り方も、円覚寺の前机の表現と非常に良く似ていて、牡丹唐草の、唐草の部分が最後延びていって、足裏の方に翻るという凝った作りになっています。胡麻幹決りなんて言われますが、縦の筋も全部彫りで表現した上に漆を塗っているということで、非常に手間がかかるのですが、一つ一つの精度がものすごく高いということが、この前机の特徴として挙げられます。

最後に、一度、この前机の修理に携わらせて頂いたことがありますので、お話させて頂きます。修理と言いましても、ほんとに部分修理で一部分だけなのですが、總持寺名宝一〇〇選の展覧会の際に、わたくしがちょうど、大学院に所属しておりまして、その中で、筆返しの部分が割れていて、展示に耐えられないかなという状態でした。そこで、修復の依頼があり、大学院の方で先生の指導のもと、修理を行ったものです。簡単な修理で、展示に耐えられるようにするための、一部分の修理でしたので、これで全て修理が完了しているというわけではないですが、この当時、調査をさせて頂いたということが非常に大事なことだったかなと思います。今、現場で仕事をしている中で、いろいろな経験と知識を身に付けさせて頂いた上で、改めてこの作品について考えてみた時に、やはり、ものすごく、力が入った、後の時代に残して行かなければならない大事な文化財かなということを感じております。こういったものも合せて、文化財の保存ということを考えていくことができれば、大事な仕事に繋がるのかなという風に考えております。

ご静聴ありがとうございました。